飲まず食はずで往來を致しましたから、腹がへこついて參りますと、大きな聲ではものも云へません、やう〳〵のことに伊勢の津へ乘り込んで參りました、同じ錢のないのなら成張つて行き宿へ泊つて見やうと、中々兩人ながら大膽な男で、當所の本陣に仁右衛門と云ふものがありました、その津の本陣仁右衛門の宅の表を通りました時は極月の廿日過のことでございましたが、泊り込みますると、藝所は頻に混雜でございまして、若い者が集まつてトン〳〵と餅搗をして居ります、おまけに大釜へ蒸籠を掛けまして餅米を蒸して居ります、この香氣がプンプンと二人の者の鼻へ入りますと源助「オイ孫作、どうも叶はんなア、大きな聲でものも言へぬではないか孫作「如何にもその通り早く飯を食ひたい」とポン〳〵手をならしますと、下女はそれへ出て參りまして、下女「お客樣お湯が沸いてございますが、お湯にお入浴りになりましては如何でございます源助「中々この經で

湯に入浴つたものなら目が醒つて仕舞ふ、切望早く飯をもつて來て呉れ下女「畏まりましてございます、暫時お待ち遊ばせ」と下女は臺所へ下りましたが、この二人の足輕の泊りました時から、本陣の主人仁右衛門は熟々二人の樣子を見て居りましたが「どうも彼は何れかの浪人だが餘程難澁を致して泊つた人に相違ない、だが中々見所のある人だ、一つ彼の衆達は斯う云ふ亂世の世の中だから、關まして見たら出世をするものに違ひない」と思ひましたものか、聽て一つの三方を取出だしまして、その中へ今搗立ての餅を盛り上げまして、二人の座敷へやつて參りました仁右「アー御客樣、どうもお泊り下さいまして有難うございます、今日は私しの方では例年の如く餅搗を致しますので いまマア臺所で餅を搗いて居ります、お見受け申せば貴下方も二本佩んで在らつしやるが、これから定めて御世出をするお身分と見受けました、どうか拙持(白餅)になると云ふ延喜を祝ひま

して持つて參りましたが、兎も角これをお召し上がりになりますやう、砂糖もありますれば醬油も黄粉もございます、お氣に召した方を着けてお食り下さいまし」とのことでございますから、兩人の者は此餅を見るともう腹の蟲がグウーッと口まで迎ひに出て參りしたから源助「イヤ誠にどうも亭主、これは千萬辱ない、披持になるやうにと延喜を祝うて呉れるとは、實に有難い、それぢやア遠慮なしに食ふぞ」と何が空腹い時に不味いものなしでございまして、中々砂糖も醬油もあつたものぢやアございません、搗立ての柔いうちでございますから、ムシャ〳〵食ひ始めました、源助はどうでも城持になつてやらうと云ふ考へか、頻に食うて居ります、然るに孫作の方は「兄貴、其樣に食つてどうする、後で飯が食へないぞ、此の餅は急には食べ切れない、折角呉れたんだから明日出立の時に持つて行つて、道中で食つたら可いぢやねえか」源助「吝嗇なことを云ふな、マア食

へるだけ食へ」と兩人は充分これを食しまして源助まづこれで腹はだ丈夫」と偖て湯に入浴りましたが、湯から出て見ますると食事がそれへ出て居ります、膳て食事も終りますと源助「どうだ孫作、當家の亭主は中々見所のある奴だ、一つ乃公が談判をするからお前は默つて見でお居て孫作「ハアーどうするんだ源助、何うの斯うのつて、乃公に任して置け」と云ひながらポン〳〵手を拍らしますと下女「ハイ御用でございますか源助「アー御面倒だが、一寸御亭主を此座へ呼んで下さい下女「畏まりました」と下女は引退がる、すると暫く經ちますと主人はそれへ出掛けて參りました仁右「ヘー何か御用でございますか源助「偖て御亭主、實に先程お前が我々をして城持になるやうにと、祝うて呉れたは誠に拙者が身に取つて大慶に存することである、所が折入つてお前を男と見込んで頼みたいことがある、何卒その頼みを聞いて呉れることは出來まいか、貴公が聞いて呉れることなら、

乾度我々一城の城主となつたその時には、御身には必ず一万石の知行を取らして、我家の家老として充分恩報ヒをするがどうだ　仁右「ヘエー、それはどうも有難うございます、イヤどうも私しの樣な町人風情のものが一万石と云ふやうな、莫大の知行を戴きますやうなことは生涯出來ないことでございますが、何う云ふことのお賴みでございますか　身に叶ひましたことなら承はります　源助「アー實の所御身のところへ泊つた時は、どうもう腹が空へて仕方がないと云ふやうな場合に陷ツて仕舞ツた、實の所は三日の間食はずに居ッたので、素よりさう云ふ我々だから路用の金子は一文も持ッて居ない、また今日新うやッてお前の方で鄭重にして泊めて呉れたが、到底も明朝お前の方の拂ひも出來ない、その上に尙は斯樣な無理を云うては濟まぬが、切望一ッ二十兩だけ拙者に金子を貸しては呉れまいか、それを我等は路用と致し、何れかへ仕官を致し乾度一日も早く出世をして、お前の方の恩報ヒを致すから　仁右「成程、　すると何んでございますか、お金子が二十兩ありましたら宜いのでございますか　源助「左樣ぢや　仁右「イヤ宜しうございます、然と考へましてお返事を致すことでございます」と早速臺所へ來たりまして、自分の家内にこの事を話しますと　女房「それ御覽なさい、だから彼樣なお方を泊めるのはお止しなさいと云つたではございませんか能う考へて御覽なさい、貴方もマア物好なお方ではございませんか、どう考へて見てもこりや、最前貴方が城持におなりなさいと云ふことを云うて、餅をお遣りなさつたものだから、夫れを能いことにして附込んで其樣なことを云ふのですから、早く錢の二百文も呉れて斷つてお仕舞ひなさい　仁右「イヤ〳〵、乃公は どう考へて見ても彼の人は見所がある　女房「へ、ー、何所に見所があるのです　仁右「マア能う考へて見ろ、彼の三方の上に山盛に盛上げた白餅、一寸マア二升五六合もあつたらう、それを二人

で食つて仕舞つて、それより湯に入浴つて、湯から上がつて飯を食つて、其上金子を二十兩貸せと云ふのだらう、何うも面白い氣質だ　女房「オヤ、マア能う其樣なことを言はれるねえ」と家内は呆れ返つて居りましたが、主人仁右衛門は少しも其樣ことには頓着致しません、早速二十兩の金子を拵へまして、座敷へ這つて參りましたが　仁右「サア旦那、御注文通り持つて參りました、どうか御遠慮なくお使ひ下さいまし　源助「イヤ誠に亭主辱ない、それでは遠慮なくこれを頂戴致す、何れ此方出世を致したならば、屹度此の恩酬しを致すであらう」とやう〳〵二十兩の金子を納めました　仁右「左樣なら御緩りとお休み遊ばすやう」と挨拶をして立つて行きましたが、跡に孫作は「オイ兄貴、世の中に圖々敷い人間も澤山あるが、お前のやうな圖々敷い人はねになア　源助「なぜ　孫作「乃公ア口に憚つて彼の樣なことは云へぬ　源助「それだから貴樣は氣が怯ないと云ふんだ、物は當つて碎け

ろだ、云うて見ぬ事には分らぬではないか、そこで此の金子が二十兩手に入つたからと云うて、互ひに此金子を使つて失して仕舞ふやうなことでは役に立たぬ、依つて貴樣に此の内十兩進らう　孫作「なる程、それで源助「お前と明日は別れて、マア互ひに一日も早くどうかして主取りをして、そこで一万石の知行まで出世をして大名となる、例へばお前が早く出世をしたら、お前の側へ出掛けて行つて、お前の馬丁となつて口取りをして生涯終らう、その代り乃公が万石以上になつてもお前がまだ其所まで手の屆かぬ時は、どうか乃公が側へ來て、馬の口を取つて馬丁となり、一代世を終ることにせねばならぬ、どうか一日も早く出世の仕つくらをしやう　孫作「ム、なる程、其奴ア面白い」とそこで兩人は確く約束をして、翌日當所を立つて左右に別れました、偖て源助はその后江州へ來りまして、圖らず蜜藤を求めまして、大和大納言秀長公に仕へました、中々斯樣な男

でございますから、追々出世を致しまして、到頭秀長公の家臣にて九千石とまで藤を頂き、佐渡守と相成りました、所が伊谷孫作はどうかと云ふと、その后中國に來たりまして、備前岡山にて其頃浮田中納言の家臣となりまして、これも追々立身登用致しまして、五千石とまで知行を取ると云ふことに相成りました、ところが藤堂は佐渡守となつて九千石でございます、もう一万石には程なく進みますことで、これを聞いて孫作は大いに氣を苛立てまして、なんでも早く乃公が出世をしたいものと心得て居りましたが、何分急には登ることが出來ません、然るに藤堂佐渡守は亦々涙人をせねばならぬことに相成りましたのは主人大和大納言秀長と云ふお方は遂に發狂を致されまして、それが爲め御自身切腹をなされまして、その家は滅亡と云ふことに相成りました、こゝに於いて藤堂佐渡守も大いに力を落しまして佐渡「いまから改めて一万石の知行を取る大名になるのは六

つかしい、その内に孫作奴は浮田家において追々立身をするやうになるであらう、然すれば彼奴の馬の口を取ちうと云ふ約束なれば、必ずせねばならぬ、もうこれまでなり」とその身は仕官を斷念致しまして、逐に紀伊國高野山へ登り出家得道を致すと云ふことに相成りました、この次第を當時伏見桃山城にお居で遊ばしました太閤殿下秀吉公がお聞きになりまして、尤も大和大納言は御自身の御舍弟、今般發狂を致して家を失ひましたが、中々藤堂佐渡守と云へるものは古今器量あるもの、これを出家得道をさせるは惜いものであると、不愍に思召しされる所より、太閤殿下にはお使者をお立てになりまして、早速佐渡守に目通りを仰せ付けられ、太閤「汝は我が弟秀長の菩提を葬はんが爲出家得道を致すとのことであるが、其方はいまより余に仕へよ必ず一城の城主として取らせん」と云ふ有難き仰せでございまするから佐渡守は鴻大もなく悦び、有難くお請けを致しました

が、全く太閤のお鑑識に依り一足飛びの立身出世、伊豫國今治において七万石の祿を下し置かれ、藤堂佐渡守高虎は遂に大名の列に加はりましたのは、全く太閤のお取立てゞございます、然るに伊谷孫作はこの話しを承はりますと、素々約束をしてありますから、つひに浮田家より永の暇を取りまして、己れが今まで召使ひました五十人ばかりの家來がありますが、そのものは悉く暇を遣はし、其身一人となつて今治に赴き、約定通りであるから佐渡守に仕へ、馬の口取りをして生涯世を送ると云ふ決心でございます、所がその家來の内重立つたる牛ばの者は、「恐れながら御主人の器量を承知して仕へた我々、主從苦樂を共に致したうございますから、是非お伴れ下し置かれたい」とありますと孫作「ハヽ、然らば附いて來い」と三十人ばかりの家來を伴れ罷り越すと云ふことになりましたが、大變な馬丁もあるものでございます、今治へ來りまして案内を乞ひ、目通りを願ひたいと云ふことを申し入れますと、今日は佐渡守佛參を致して留守とのこと、然らばお歸りまでお待申すとあつて、城門に控へて居ります、所へ佐渡守は馬上優かに打ち跨り、多くの家來を引伴れまして歸つて參りました、この時伊谷孫作はバラ〳〵ッと馬の前へ立ちまして孫作「御主人只今お歸りでございまする、伊谷孫作約束通り今日より馬丁となし下し置かれたい」と、馬の口を取りました佐渡「オイ〳〵」孫作、なにもそんなにして呉れないでも宜いではないか、實に乃公は氣が苦いぞ孫作「けれどもこれがお約束でございますから佐渡「ア、宜しい、兎も角も城内まで來給へ」とそこで城内へ通し、兩人は久々にて面會を致しましたが、改めて伊谷孫作は當家の家來と云ふことに相成りましたのでございます、そこで佐渡守は太閤に仕へまして種々の軍功に依つて、遂に勢州津に於いて三十二万石と相成り、藤堂和泉守と立身出世を致しました、これに依つて伊谷孫作は伊

賀の名聲に於ざまして一万五千石を遣はし、藤堂宮内少輔と申しましたはこの人でございます、藤堂家の客分、マア云はゝ別家を致したのでございます、また津の本陣仁右衛門なるものは約定通り一万石を取らせまして、家老の一人と致しましたが、これを藤堂仁右衛門と申します、是れ全く以前の返禮でございます、斯樣な廉がございますから縱令當時は德川に使へて大老職と云へども、佐々木金吾の目から見れば、これ程のことを云ふのは然りなことです、流石の藤堂和泉守高虎も大いに赤面を致して、餘儀なくその席を退りまして、まづ老中一同評定の上、どうしても二代將軍家のお目通りへ出ださんければならぬと云ふことに相成りました、そこで改めて吹上評定所へ呼び出だし、愈々大助將軍目通りにおいて利辯を振ふと云ふお話しでございます、一寸一息御免を蒙りまして次回に。

第十一回

されば前回に伺ひました如く、何分老中大老等の面前において更にその願ひの義は申し入れません所から、止を得ざる場合にて、二代將軍秀忠公の御前へ出だすと云ふことに相成りまして、將軍家にも餘義なくこの儀を御承諾致されました、偖て吹上評定所へお出ましに相成つて、右三名の者に目通りを申し付けました、此時眞田、阿田森、荒川の三名は遙か此方に着座を致します、今日こそ荒川熊藏威張の役だ、何奴此奴の用捨はない、次第に依れば我が腕前の程を見せて呉れんと、手に汗を握つて大助の背後に堅唾を呑んで控へました、尤も正面の御座の御簾の内に御着座に相成りましたるは、二代將軍秀忠公でございます、お側には大老井伊掃部頭、藤堂和泉守を始めと致し又老中土井大炊頭、酒井雅樂頭、青山伯耆守、本多上野介、安

藤對馬守、まつた若年寄には秋元但馬守、板倉内膳正、内藤備理之進、森川出羽守、水野主水正、其外徳川四天王酒井、榊原を始めとして、其頃江戸表に罷り在りましたる諸侯の銘々、蜂須賀長門守、加藤肥後守、丹羽加賀守、小笠原左近將監これ等の方々を始めと致し、又旗本若席の場所には大久保彦左衛門、水野十郎左衛門、石谷十藏、近藤登之助、阿部四郎五郎を始めとして、その他お側、御目附、町奉行、寺社奉行を始めとして天下四十八高の御役人、綺羅星の如くに相列びましたることでございます、この時薩州の家來阿田森伊賀、豐臣の家來佐々木金吾、附人今井駿河、今般願ひの筋あつて御目通りを願ひ出でましてございます」と申し上げると、秀忠公三名の者を御覽に相成り「豐臣家の願ひの次第、聞いて得させるが宜からう」

とあります、依つて奏者よりこのことを老中へ申し渡しました、然るに老中本多上野介月番でございますから、席を進み出でまして、大目附横田備中守へ沙汰に相成ります、偖て三名より差出だしたる願書を取上げまして、御目通りに於いてこれを高々と讀み上げました、其の文意は『先年徳川家より仰せ出だされましたる豐臣家再興の爲め、駿府に於いて百万石を取らすると云ふ仰せなれど、豐臣家は駿府に綠なく、依つてこれを御辭退申上げ、攝州大阪に於いて十万石を下し置かれたいとのことを再三御願ひに及ぶといへど、今もつて何の御沙汰もなく、依つて態々今般出府に及び、將軍家へ直々に御願ひを申上げる次第云々』と云ふことが記してございます、然るに本多上野介はこれを聞き終りまして、些か席を前に進み出でまして上野「偖て豐臣秀頼の名代、先般將軍家に於いて仰せ出だされたる駿府百万石の義は、全く上様格別の思召をもつて下し置かれ、豐臣家

再興致せと云ふ御沙汰である、然るに如何心得て此樣なる願ひを致すや、上樣思召しの有難きを思はず、却つてそれを辭退に及び、大阪を望むとは如何なることである、然る義は決して相成らぬぞ、依つて其方共は歸國の上、秀頼殿ならびに島津義弘へ左樣申せ、上に於いては左樣な義は相成らぬ」とポンと言渡しになりました、されば一統の銘々は豈も大助は默つて歸るまい、名代佐々木金吾と成つて來たからには何んとか返答をするであらうと、何れも耳を欹て伺ひ居りました、然るに大助はやはりツと本多の方を睨めつけ大助「アイヤ、お控へ召され上野殿其許は天下の老職を勤めながら、道を知らざる只今の一言、大阪城を望む豐臣家のことを辨まへあるや、御存知あらば只今拙者この所にて尋ぬる仔細あり、返答に及ばつしやるか上野「ムツ如何にも返答致すである大助「然らば德川家は故太閤の御恩を蒙むりしことを、辨へあるや如何でござる上野「如何にも御當家は

既に三河國より出でさせ給ひ、關東を切從へ給ふ、尤も織田信長公と義を結び給ひしが天正十年右大臣信長公は逆賊明智光秀の爲に京都本能寺に於いて滅亡致されたるその后、御當家は太閤に從ひ、天正十八年相州小田原征伐の砌軍功に依つて、故太閤より關八州を給はりしことでござる」大助はこの時大音に、大助「お默り召され、上野殿、小田原征伐は當家の軍功にあらず、尤も北條家武道未熟とは云ひながら、八ヶ國を領する大名なり中々德川家の及ぶところにあらず、これ偏に故太閤の御威勢盛んなるに依つて亡びしなり、それになんぞや北條家を亡ぼしたなど、心得違ひなことを申さるゝな、素より德川家は豐臣の臣下なり、既に慶長三年八月十八日太閤御他界ましましたるその砌、秀頼公は未だ五才にして御幼年たるに依り、前田利家、德川家康、この兩人をもつて後見となし、秀頼公十五才に成り給はゞ、天下の政權はもとゝ秀頼公に讓らるべきところの契

約である、右證人は石田三成でござる、然るにその翌年四月に至つて前田利家逝去なし、これに依つて天下の政治は德川一名のものとなり、それを怒つて石田三成慶長五年關ヶ原に於いて旗あげに及ぶ、それに何んぞや豐臣家を亡ばさんなどゝ軍馬を向けると云ふは、これ全く人倫の道にあらず、然るに此度心づき給ひ、駿府に於いて百万石を下し置かれ、豐臣家再興の思召しはこれ當然のことである、なんぞ恩に掛ける所あらんや、且又駿府城は德川家には由緒これある城なりといへど、豐臣家には更に緣なき城である、これに依つて大阪城を望まるゝ所である、素より大阪城は故太閤の繩張りにして、豐國大明神が魂をいれ給ひしところの城なり、依てこれを望はむ理の當然にあらずや然るに古主豐臣家の名代たる我れに向かつて、大阪城を望むは不埒であるなどゝは無體の一言、これ全く將軍家の御存しなき

ことゝ存ずる、上樣の思召しも辯へず、答め立てを致するは、却て其許こそ不忠ならずや、是非共大阪にて十万石を給はらんことを希ふ次第である」とさながら辨舌立板へ水を流すごとく少しも訥みなく音聲玲瓏として述べ終り、座中をクワッと睨み付けました、されば これが爲に一統の銘々も、なる程若年なれど撰ばれて來るだけあつて、天晴の辨者であると、皆々感服致し居りまする、これを聞いて本多上野介は大いに憤はりまして

上野「默れ金吾、豐臣家のことを重んじ、己れの非を隱し、人の非を打つは何事ぞや、既に故太閤は織田家の天下を奪ひしにあらずや、されば大德寺燒香の場にあつて、日本諸侯列席のそのうちにて、三法師秀信君をもつて織田家相續の儀を、はからひ其身後見と披露致しながら、遂に天下の政權を握り、織田の天下を横領したるは何事である、然らば德川とてもこれ順當のことにあらずや」佐々木金吾は大いに怒り 大助「お默りなさい本多

上野、其方園老を勸めながら、治亂の論を存せぬと見ゐる、後學の爲に申し聞かせるから能く承はれ、既に天正十年六月二日京都本能寺に於いて逆賊明智日向守光秀、數年の大恩を忘却に及び、逆意を企て右大臣信長公を擊つて帝都に旗を揚げしなりその上己れ將軍となつて近國の武士を味方につけんとす、こゝに於いて奸賊蟻の如くに集まり、その勢ひ盛んにして、容易にこれに向つて手をつけるものなし、然るにその砌德川家康殿は泉州堺にあつて都の大變を聞くとひとしく、吊ひ合戰をなす所存もなく、周章狼狽、伊賀越の間道を越ねて遠州へ逃げ歸られしは何事ぞや、まつた大阪の砦には紀州より引返したる神戸を始め丹羽、池田その他高山、蜂舍兄弟、これ等の輩ありといへども、逆賊光秀の勢力に恐れ、誰一人として軍馬を差向けるものなきを中國より故太閤秀吉公引き返し給ひ、尼ケ崎に於いて諸將を集め評定をなされたり、然るに諸將より强ての願ひに依つて殿下には總大將となつて、六月十三日山崎に於いて光秀を相手に天下分目の大合戰、幸ひにして首尾能く勝利を得給ひ、彼れ光秀を亡ぼし給ひしは、これ皆秀吉公の大功なり、これに依つて一天の帝の勅命を蒙り、天下の政權を委ね給はりしとぞある、その砌は銘々我が國を大切に致し、いづれもこれに從ふものなく、越後に上杉、中國に毛利、九州に島津、四國に長曾我部の輩あり、これ等の銘々何れも天下を望ひの下心ありて日々軍議を凝し居る折柄、中々水上の泡の如き三法師君、なんぞ天下の政權を握ることを得んや、これに依つて秀信公は濃州金華山岐阜に於いて三十万石を拳り、近江中納言秀信公と申し拳りしはこの君なり、然るに家康公伏見桃山の御殿に於いて太閤に神文誓紙を致されたるは、これ既に世の治まりし時である、何んぞ同日の論にあらんや、それを織田家の天下を横領なぞは無禮の一言、控へさつしやい」これを聞いたる荒川熊藏「ウ

ム――ン」と唸り出しました熊藏「中々ぞうも眞田と云ふ奴は能く饒舌るやつだ、乃公にも少しやらして呉れゝば宜いに」と本多をハッと睨めつけました、有繋の本多もハッと閉口致しまして、一言半句の答へもございません、これが爲に列座の諸侯役人に至るまで、互に顏を見合せ、暫時の間は無言でございました、依つて將軍家より藤堂和泉守へ御沙汰になりました秀忠「その方出でて本多に代つて取らせよ」とあります、だが先程藤堂は大助の爲に以前のことを云はれ、取挫がれましたることでございますから、到底もこれは出た所が駄目だと思ひますから、俄に病氣と偽はり退座を致しました、サア斯うなると誰一人として出るものがございません、據なく諸侯の中に目配せを致されました、依つて蜂須賀長門守ッカ〳〵とその所へ進み出ました長門「アイヤ、豐臣の名代佐々木金吾とやら控へませ、上樣の御目通りも憚らず大盲を拂ふは甚だ不埒千萬、汝如何程願ふと云へども大阪城を與へ、豐臣家再興の願ひは叶はぬ、又公儀の役人に對し大聲を發するは無禮極まる致し方、控へ居れッ」此時ヤッと振り返りましてギロリと顏を睨めつけました大助、見ると萬字の定紋を着けて居りますから、ハヽア偖ては蜂須賀であると思ひながら此方へ向き直りまして大助「ナニ控へよ、我に向つて控へよなぞゝ無禮なる一言、お默りあれ」と睨めつけました、そりやまた燃えだしたぞ、この火手は中々消えまいと皆々顏を眺めて居りますると大助「全体其許は何者だ」長門「されば阿州德島の城主、蜂須賀長門守である、大助「ハヽア偖ては蜂須賀であるか、御身の先祖彦右衛門は尾州海東郡の野武士、所謂盜賊の首頭であつた、然るに故太閤いまだ木下藤吉郎と云へる頃はひ信長公に從ひ追々の立身、其頃駿遠三三ケ國の城主今川義元と武勇を爭ひし節、何分一家中の者はその大軍を恐れ、何んとなく進み兼ぬる樣子、依つて江州觀音寺より佐々木の援兵を借り

受けると披露し、その時始めて故太閤のお見立に預り戰場へ罷り出でたる御身の先祖、それを一ッの縁としてその后美濃表齋藤征伐の砌、萬事太閤の影武者となり、山中にあつて色々と小刀細工を致し、漸々のことに故太閤の御取立に預り大恩を受け遂に一國一城の城主となつたのではないか、その大恩を忘却に及び、今日にては德川家に從ひ、この席に出でゝ、願ひの義は叶はぬ、豐臣家再興の義は叶はぬなどゝは誠にもつて無禮の一言、「控へ居れッ」すると後に控へた荒川熊藏、もう實に堪り兼ねまして默つて居られません熊藏「ヤイ蜂須賀、貴樣の先祖は大盜人だ、そのしるしには貴樣の紋所は曲つて居るではないか、如何に殿中一統の方々、その流れを汲んだる蜂須賀であるから隨分懷中物を御用心なさい」思はず知らず座中諸侯の銘々クッ〳〵と笑ひ出しました、やうもこの盗梅式では誰が出ました所が仕方がございません、依つて井伊掃部頭樣も仕方がないから

こゝに工夫を致されまして、時計番に申しつけ、俄に時計を早く致すと云ふことになります、そのうちにギッ〳〵チャン〳〵〳〵と時を報じましたのは午刻の時計でございます、依つて井伊掃部頭は席を進み出でまして掃部、其方共の願ひは一應然ることとなるが、最早今日は刻限にもあり、依つて公儀に於いても篤と協議の上、追つて呼び出だすであらう、まづ今日は引取れ」とあります大助「仰せ御有理にはございますれど、將軍家へ對しましてお願ひを致さんと存じ、我々遙々遠路の所を罷り越しましたる事にございます、是非共この願ひ御聞屆け下し給はりたし掃部「有理のことではあるが、この義は中々一應にては參り兼ねる、殊に今日は最早刻限にも相成つて居ることである、なほ上樣御不快に在らせらるゝから、早々引取るが宜からう」とあります大助「ハヽッ、然らば今日のところはこの儘引取りまする、是非一日も早く御取計らひの程を願ひたい」とあつて、

遂に其日は引取りました、愈々中二日を經きまして再び御目通りへ呼出だしに相成りまする、と云ふ、今般は眞田大助一生懸命とあつて天下の大老井伊掃部頭を向方へ廻し、及び、さしもの大老井伊掃部頭も實にこの者ばかりには辟易致され、充分に議論に諸役人一同も持餘すと云ふ、これに依つて大久保彦左衛門止を得ざる場合、實に將軍家の一大事と見做して飛び出だし關東は承知に及ぶ、この上からは一天の帝の御聞濟さへこれあらば、何時なりとも、と云ふので愈々關東より京都へこの義を願ひ出だすと云ふことに相成りましたが、これからが一番眞田大助、如何致してこの大敵の中をきり拔けるや、その實道中に於つて大助を亡きものに致さんと、これをつけ狙ふと云ふ關東の計略ひ、もし大助を京都へ登らす時は飽までも關東の不利益と云ふので、こゝに諸役人の銘々充分に手配りを致しましたが大助の計略却て敵の裏をかき、樣々苦心の上この危難の中を遁れまして、首尾能く京都へ出ますると云ふ、大助はその身一代の才智を一時に振ひ出だすと云ふ、愈ゝ豐臣家再興に付、眞田大助働きのお話しに引移りまするが、何分紙數に限りがございますから、これを以つて本編はお預りと致し、尙引續きまして「難波戰記後日談眞田大助」と表題を下し、京都の大問答の一條より、首尾能く豐臣家再興の綸旨を給はつて薩州鹿兒島へ引揚げるの際藝州廣島に於いて何れも必死の大難を首尾能く遁れ、それより鹿兒島へ歸り、いよ〳〵豐臣家再興の間際に至りまして、けなき事情より遂に事成らず、可惜名家の豐臣も、こゝに其終りを見まするとこと云ふ、本編大團圓に相成るまでのお話しを、委しく伺ひ局を結ぶことに致しまする、何卒諸君後編の出づるを待つて、本編とお引合せの上、御愛讀あらんことを偏に願ひ奉ります。

難波戰記後日談

終

明治卅三年十月　日印刷
明治卅三年十月　日發行

復製不許

發行者　大阪市南區長堀橋筋二丁目七十九番地　博多久吉

印刷者　大阪市南區西濱水町二百二十三番地　井下幸三郎

發賣所　大阪市南區堺筋八幡筋南角　博多成象堂

同　大阪市南區道頓堀馬門東へ入　大岡萬盛堂

●興味の好作品●

三味線獨案内

東京　正岡儀一郎
大阪　北村錦
著作代用　一柳堂

南は琉球諸島に沿と入るより、北は奥羽に渡酒を酌みて寒を防ぐ千島に至るまで人として音楽の嗜好あらざるなく、国として楽器あらざるなし、然れども、我国に行はるる三弦の如く、調楽に宜しく、合奏に宜しく、高尚なる音を發すれば、意氣なる音を發する者なし、況んや其撥弦術にして、單に指頭と撥との作用に因て、各種精緻の曲を奏するを得るの情に於て、他の百千の楽器に勝れる、美術的の妙味を認む、然れ共學び難くして其奥を極むるに難きも、又此三弦に如く者なし、本書は、著者が多年の苦心に因りて此の因難なる楽器を平易に習得るの方を發見し、是れを詳細に記述したる者にして、三弦の歴史、其他の事、調の事、撥所の事、使用法の得等、悉く列記しあれば、音楽と聞して些の素養なき者も、此書に因て獨習なさば、如何なる難奏の曲と雖も、直に練熟するを得べし、在朝の諸君よ、世間数多のアモ獨習書と同一視せず、一讀以て其名に負かざるを知り賜へと云爾

明治卅三年十月日印刷
明治卅三年十月日發行

複製不許

發行者　大阪市南區長堀橋筋二丁目七十九番邸　博多久吉
印刷者　大阪市南區西濱水町二百二十三番邸　井下幸三郎
發賣所　大阪市南區堺筋八幡筋南角　博多成象堂
同　大阪市南區道頓堀黑門東へ入　大岡萬盛堂

●消閑の好伴侶●

獨習自在

三味線獨案内

正價　廿錢
郵稅　六錢
郵券代用一割增

南は椰子樹下芭蕉扇に涼を入るゝマニヲより、北は爐邊に濁酒を酌みて寒を防ぐ千島に至るまで人として音樂の嗜好あらざるなく、國として樂器あらざるなし、然れども、我國に行はるゝ三弦の如く、獨奏に宜しく、合奏に宜しく、高尚なる音も發すれば、意氣なる音も發する者なし、況んや其構造簡にして、單に指頭と撥との作用に因て、各種精級の曲を奏するを得るの点に於て他の百千の樂器に勝れる、美術的の妙味を認む、然れ共學び難くして其奥を極むるに難きも、又此三弦に如く者なし、本書は、著者が多年の苦心に因りて此の困難なる樂器を平易に獨習し得るの方を發見し、是れを詳細に記述したる者にして、三弦の歷史より、姿勢の事、譜の事、感所の事、使用法の事等、悉く列記しあれば、音樂に關して些の素養なき者と雖も、本書に因て獨習なさば、如何なる難奏の曲も、直に練熟するを得べし、江湖の諸彦よ、世間幾多のデモ獨習者と同一視せず、一冊以て其名に負かざるを知り賜へと云爾、

新刊豫告

神田伯龍講演 難波戰記後日譚

藤井南龍講演 本朝三彌太郎 加田彌太郎

百武琴玉講演 西遊記

朱雀亭玄武講演 大鹽平八郎

石川一口講演 久松桃太郎旅日記

一川一口講演 柳生飛驒守

氏原魯山講演 水戸黃門 四國漫遊記

神田伯龍講演 阿波騷動

鳳遊軒英雄講演 本朝三彌太郎 朝比奈彌太郎

總亭有巢著 粹人必携 遊藝全集 全拾冊

宇野不及先生著 演舌獨稽古

有文居士著 普通尺牘 新案用文大全

博多成象堂出版目錄

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 冬合戰 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 夏合戰 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 後藤 敗 晃五郎 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

石川一口講演 丸山平次郎速記 柳生但馬守 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

石川一口講演 丸山平次郎速記 笹野權三 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

氏原魯山講演 山田都一郎速記 水戸黃門 北國漫遊記 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

三省社伯馬講演 棧橋貞二速記 弓之天下 星野勘左衛門 正價廿五錢 郵稅八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

三省社一瓢講演
山田都一郎速記

關口彌太郎 正價三十錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

玉田玉鱗講演
山田都一郎速記

關口八郎 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

中山問答 正價廿五錢 郵税六錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

中山大納言 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

石川一口講演
丸山平次郎速記

加賀驛動久松桃太郎 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

石川一口講演
丸山平次郎速記

俠客魔喜三郎 正價廿五錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

三遊亭花遊口演
丸山平次郎速記

俠客牛若長治 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

伊賀越後日仇討 正價廿五錢 郵税八錢
洋裝美本表紙極彩色木板摺

玉田玉鱗講演
山田都一郎速記

水戸黄門中國九州漫遊記 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

西尾東林講演
丸山平次郎速記

天明八人白浪 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

あざみ小僧 正價廿五錢 郵税六錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

るかけ松 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

國定忠次 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

松月堂呑玉講演
丸山平次郎速記

大川友右衛門 正價廿五錢 郵税六錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

石川一口講演
丸山平次郎速記

鼠小僧 正價廿五錢 郵税六錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

西尾東林講演
丸山平次郎速記

毒婦おすみ 正價廿五錢 郵税六錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

石川一口講演
丸山平次郎速記

俠客小狐靈三 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

石川一口講演
丸山平次郎速記

長門守木村重成 正價卅錢 郵税八錢
洋裝美本表紙口畫共極彩色木板摺

宇保野昆陽先生著
川上泊堂先生書

往復かき日用新用文 正價拾錢 郵税四錢
木版大字初字作文兩用美裝美本

原田重一著

帝國用文獨案內 正價十錢 郵税四錢
洋裝美本全一冊

抱月居士著
新撰劍舞獨稽古　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
山野徳山畫
美術工藝　名所畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
山野徳山畫
美術工藝　山水畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
前野春亭畫
美術工藝　万物畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
山野徳山畫
美術工藝　花鳥畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
前野春亭畫
美術工藝　浮世畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
前野春亭畫
美術工藝　實用畫譜　正價十錢　郵税四錢　銅版彫刻和裝美本全一冊
盛業館編纂
市町村便覽　正價八十錢　郵税廿錢　クロース綴金文字入七百ページ余
軍歌一萬集　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
さわり大よせ　正價五錢　郵税二錢
日清遊藝一萬集　正價五錢　郵税四錢
日清替歌　支那大敗　正價八錢　郵税四錢

阿房亭主人著
新作おとし噺　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
南廓屋狸遊作
當世はやり歌　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
竹廼本主人編
新作さわり大全　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
南廓屋狸遊編
新撰地歌大全　正價十二錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
瓢亭粹士編
粹のふところ　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
愛國散士編
日本正歌　正價十錢　郵税四錢　洋裝美本全一冊
凝香園主人著
百人一首註解　正價十二錢　郵税四錢　附作者小傳及歌學史　洋裝美本全一冊
大館金城編
生花早指南　正價十二錢　郵税六錢　洋裝美本全一冊
大館金城編
万國年代記　正價十錢　郵税四錢　折本美裝全一冊
大館金城著
万國明細全圖　正價六錢　郵税二錢　美裝袋入全一枚
原田重一著
官地測定大阪市街全圖　正價十錢　郵税二錢　美裝袋入全一枚

新御二輪加　正價四錢　郵税二錢

西洋手奇手品　正價四錢　郵税二錢

新案意匠畫さがし　正價四錢　郵税二錢

改所畫さがし

佐東柳水著

藝人譚　正價十五錢　郵税四錢

洋裝美本寫眞版數葉入

手風琴獨學　正價廿五錢　郵税四錢

洋裝美本全一冊

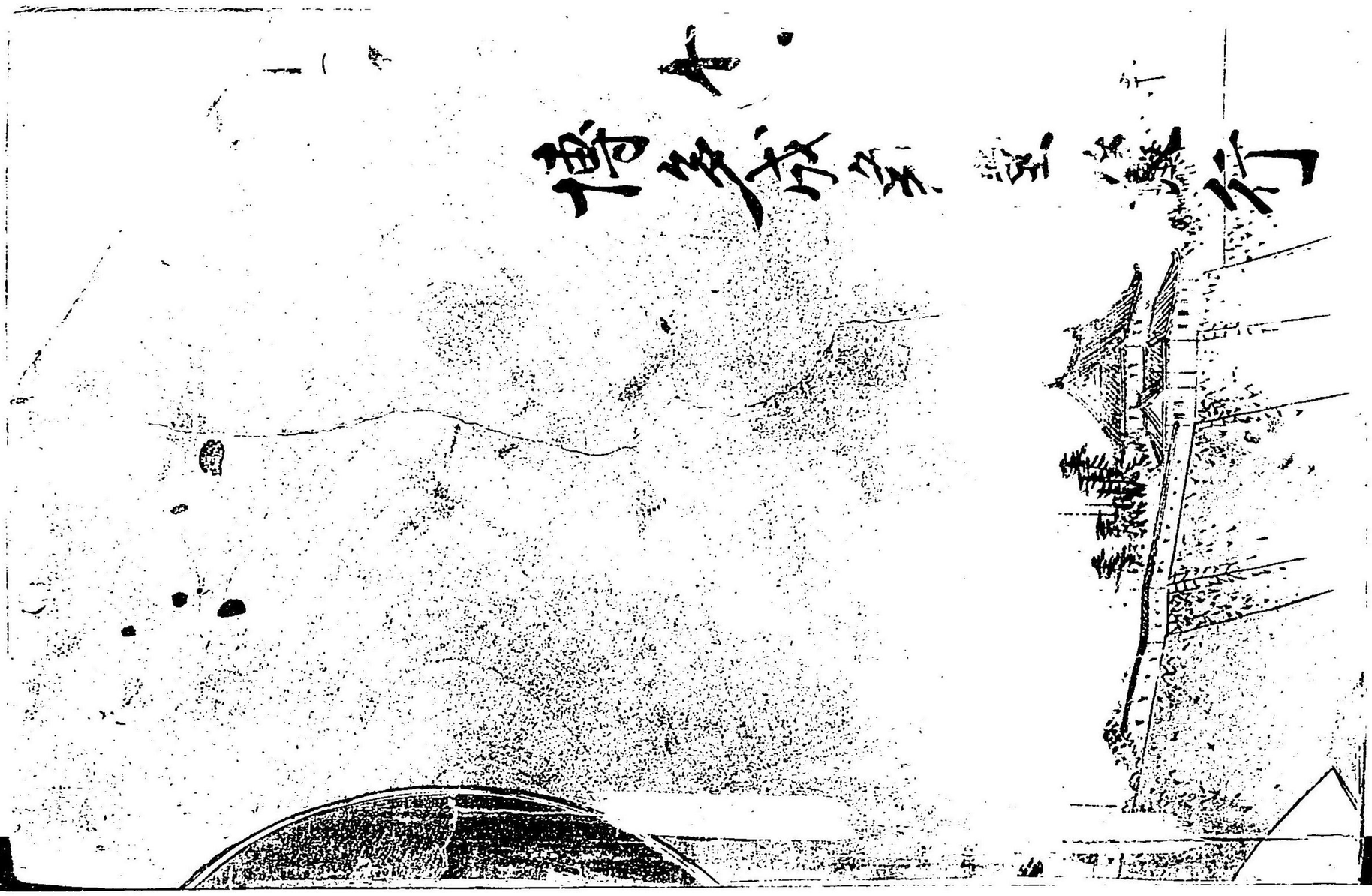
花柳散士編

遊藝大集　正價十二錢　郵税六錢

洋裝美本全一冊

ハ店儀愛顧各位之御引立に因り商業日增に繁昌仕候段肝に銘じ難有奉存候付ては非常の勉强を以て御小賣共多少に關せず他版と手版とを分たず誠實に迅速に御注文に應じ候間倍舊御眷顧之程希望仕候也

博多成象堂主人敬白



特8
361

097472−000−5

特8−361

難波戦記後日談

神田　伯竜／講演

M33
DBS−1382